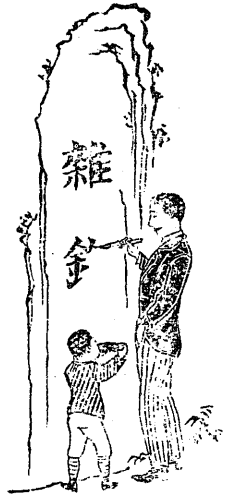
れば。といはれしに、何故と弟の問返し、かは、お前も姉様も凡べてお前方兄弟は嫁に對して小舅とはいふなり。と說明れしに、では兄さんも小舅かへ。



花の時

臥龍、江東の梅花既に過ぎて、更に、墨田飛鳥の櫻の時期となりぬ。急がしかりし學年末の試驗も片づきて、こゝ數日は、まさに身體の休養の時なり。學生にとりては、一年中眞の正月休なり。一日の閑を造りて、行いて野に山に散策を試みんか櫻花の空、菜黃の畑、微風の身にそよぐ、告天子の天に囀る、何れか心目を喜ばしめざる。行け〳〵、墨田は既に、孃を待てり、飛鳥も待てり。若し夫れ、飯田町を發し、往復三時間の瀛車を耕りて、小金井に遊ばんか、見渡す限り爛熳たる櫻花は、淸流をさし挾むで幷ぶ。積日の鬱を散ずるは、まさに今日この時。大に鬱を散じて而して將に來らんとする炎熱に向つて、大に心身の鋭氣を養はれよ。

思ひ出るまゝ

仙臺から北へかけて、盛岡、北海道に至るまでは、殆半歲の間、雪に埋れて居る有樣なれども、花見には最も屈竟の地方なり。梅は四月に至るも尙開かず、況んや櫻花をや。東都に在りて、漸暑を覺え、重衣を脫せんとする五月の末つ方に至ればまさに此地方の春の最中にして、併も、東都以西の人の見るを得ざる梅櫻桃季百花一時に開く奇觀を呈し、殘雪は、たゞ遠

の山の端に名殘をとゞむるのみ。

▲言葉の訛りは、特に仙臺附近を最甚しとす。試に瀛車中に在りて、賣り子の呼び聲を聞け。

すんぶん（新聞）は、いかゞ――！、まんづう（饅頭）にあんもつ（餅）はいかゞ――！　おすゝは、いかゞ――！

▲某陸軍大佐の話なりとて、或人の語らるゝには、大佐は、京都ステーションにて一等瀛車室に乘れり、同乘人には、他に外國人の紳士夫人を伴へるあるのみ、折しも、ある金滿家の若旦那らしき身なり立派に裝へるが、數多の見送人に送られて、こゝに入り來れるあり。瀛笛一聲、ごきげん宜しうゝの聲を後にして七條ステーションを發す。大佐は、椅子によりて新聞を讀みつゝあり、外國人は夫妻にて、互に何か語りつゝありしに、例の立派の若旦那は、折しも、夏の半のことゝて、羽織を脱ぎ、帶を解き、遂には衣服を全く脱ぎすてゝ、忽丸裸となりて、脱ぎすてたる衣類を疊みにかゝりぬ。外國夫人は、顏を眞赤にして、夫に何事かさゝやきて、窓外に向きぬ、紳士は、一寸裸の方を眺めて、顏をしかめながら、これ亦戸外にそむけたり。

此際大佐は、この破廉恥なる擧動を見て恰我軍隊の恥辱を、外兵の前に曝されたるが如くに感せしが、さりとて致し方もなく、しばしは、彼のせん樣を見居たりしに、彼は何の考もなく。悠々として、カバンの中の單衣と着代へ終り、やがて次のステーションに來るや、忽この室を出で去りぬ。暫して、と見れば、彼は以前に似合ぬ粗服して三等室にて、高談放笑しつゝありき。如何に無教育の致す所とはいへ、今少し帝國の體面を考へられたきものなりと。

一友傍に在りて曰く、なるほど京都人には、ありそうな話なり。

ストライキ節

東雲のストライキ云々の歌詞、一向に分らず。さりとは、何の意味なるかとさま〳〵考へたる結果は、次の原由のあることを聞き出したり。

一時、自由廢業の盛なりしころ、芳原の一娼妓東雲と呼ぶ者、廢業を思ひ立ちて、交番にかけこみしに、手續に手落ありとて、警官より樓に歸らんことを、説諭せられし折、彼は涙に咽びて「歸るは歸るが、さりとは辛いねー」と語りしとか。之より遂にストライキ節となりて、今や全國の丁稚小僧より堂々たる紳士令嬢に至るまで、口にせざるなきに至り、さしも流行を極めたりし大和田氏の鐵道唱歌も之がために壓倒せられて、後に撞著たり。嗚呼我が邦人の音樂的嗜好は、一代の文學家の作を捨てゝ、然もこの不祥なる一賣女の片言に同情を表することの多きか。さりとは、まことに辛しといはざるべからず。

禿頭病

禿頭病勢ますゝ逞しく、こゝの姫君、かしこの學生までも、この病の襲ふ所となりたりなど、日々の新聞紙に傳へらるゝに至りぬ。不衛生極る女髪結の手にかゝらざること、最必要なることながら、湯屋にて、髪を洗ふことなども、最避けざるべからず。はた又、一家内に在りても、めい〳〵自分〳〵の髪道具などをチャンと一定して、他人のを一切使用せざること、最肝心なるべし。尚右に付き二月發行の衛生談話第二號には左の如く記せり。

或る專門技師の談によれば此疾病は羅甸語にてアロペチヤ、アレアーター即ち邦語にて之れを訓譯すれば鬼瓶頭といふに當り人間の毛髪即ち被髪部に發生するものなるが重に頭部に發生する者にて最初は一ヶ所に禿點を認め漸次周圍に向つて增大し暫時にして圓形若くは楕圓形の無毛環を形成しその周圍の毛髪は漸次悉疎となり直に脫落始む此の如くにして壹圓銀貨大となり各環聯合して樹葉狀を形成し最も性惡なるものにいたりては全頭を犯すの外髯毛、腋毛、陰毛眉毛、睫毛、その他あらゆる毛髪をして脫落せしむるに至る而も此

的等の惡性にいたりては極めて罕なり、萬一この疾病に罹れる婦人は容貌を貴ぶ婦女の天性として羞恥の極往々自殺を企つるにいたる者あり併しながら一般に此疾病の豫後は決して不良にあらず毛髮は再生する者なり玆に一例を擧れば該患に罹り三十五年の後に至り一旦不治と認められしものも枯木の再び華咲くが如くに再生したることあり、疾病の原因については二種の學說あり一は皮膚等の營養神經の疾患なりといひ此說に左袒するもの多し第二は植物性の寄生物に重きを置く人あり此第二の原因としては實際における流行をもつて論據とするものあり例へば近年佛國における或兵營中短時日において八十人の流行を認めたることあり又獨逸においても流行ありしことあり故に大阪におけるも或は所謂第二のものなるやも測られずこれ又或は第一の疾病流行しつゝあるやも知るべからず兎に角目下取調中なれば不日判明するの期あるべしいづれにせよ別段恐怖する程の病氣にあらざるは明かなり、又その療法の如きも相當に存在しあるを以て萬一該病に罹りたりと思惟せば醫師を迎へて治療を乞ふの必要あるは勿論なり、次に公衆衞生の取締としては第一流行の徑路とも認め得べき理髮店湯屋等入込の場所は、注意するの價値あるも別に取締を嚴重にするに及ばざるべし、又學校等に流行する際には校長その生徒を離隔する必要も起るならん云々。

順境の淑女と逆境の烈婦

親愛なる諸姉諸孃、古來苦心慘憺たる逆境に處して遂に萬世に名をなせる幾多の烈婦は、平素常に諸姉諸孃の摸範として、面前に提示せらる。吾人は、實に逆境に在つては、諸姉諸孃が奮つて、之等烈婦の行動を摸せられんことを望む。然れども、由來悲慘なる人世の逆境は、吾人の生涯に於て甚稀に起る所のもの國家も家庭も、此の如き烈婦を要することは、其場合まことに多からざるなり。

且又、いはゆる偉人烈婦と稱するもの、其逆境に處したる時に於て、始めて其行動天地を動かすに至れども、順境に於ては、まことに平和順良の淑女なり。蓋し順境に在りて細瑾苟しくもせざる君子淑女にして始めて逆境に於ける偉人烈婦となる。大功不レ顧細瑾とは、屢々我東洋流の英雄偉人を凝する者の其意を誤りて、口にする所なりといへども、吾人は取らず。

敎ふる諸姉、敎を受くる諸孃、偏に逆境に於ける烈婦の行動のみを見て、其順境に於ける淑女としての彼等の面影を忘れざらんことを希望するものなり。

趣味ある家庭

世界中、最家庭の趣味を樂ひは、獨逸國民に如くはなかるべし、社會の下層に位せる、言はゞ勞働者、工夫の如きに付きて見るも、尙之を知り得べし。彼等が戸外に出でゝ、勞働するや、十二時より二時に至る間は、即、晝食の休憩時にてあるなり。此時間に至るや妻は、其家よりはる〳〵一家中の晝食を用意して肩にかけて、仕事場に來り、子供はカバンを肩にして、程近き學校より、此處に集り來り、かくして、其時間內に於て、父子夫婦兄弟、融然として團欒の間に、晝食を終る。彼處に五人、こゝに七人、所々、散點して、青空の下、野花の間、至る所、最自然なる、最愉快なる、家庭的生活を樂みつゝあるを見ん、既にして二時の號鐘ひゞき渡るや、妻君は、夫々辨當がらを片づけて、背に負ひ、子供らは、また〳〵カバンを肩にして、レーベンヲールなる語とゝもに、夫や父を工場に殘して、家路と學校とに歸り行く。金殿玉樓珍味美食に飽きて、しかも樂を家庭に、取ることを知らざる我邦人は、これに付きて、如何に感ずべきか。

由來、獨逸人が、着々として事業に成効する所以のもの、一は其忍耐不屈の精神に依るといへども、この趣味ある、一片家庭の溫情、又大に預つて力ありと云はざるべからず。

我が敵を愛せよ。

愛の極限は、遂に己の敵を愛するに至る。基督曰く、爾曹の敵を愛し爾曹を詛ふものを祝し、爾曹を憎む者をよくし、虐溫迫害する者のために、祈禱せよと。是

れ、耶蘇教の本旨にして、又實に、愛の極限、人道の極致を顯せる格言なり。

今回、北清に於ける聯合軍の蠻行は、今や既に、世界に知らる。從來、基督教國を以て、自ら任じ、文明を以て、自ら誇りし、西洋列國は、北清事件に於て、遂に其眞想を世界に曝露せり。彼等は、もはや基督の名を捨てざるべからず。綿羊の姿を以て、虎狼の慾を逞しくするもの、試に其狂暴殘忍の一節を擧げんか。無辜の人足を、もに至るまで、一々捕縛せられて、無殘なる銃殺の刑に處せらる、こゝには父子相並んで虐殺せられ、彼處には夫婦相擁して慘殺せらる。血は混々として、街路を浸し、人家は至る處、死屍鮮血を以て汚さる。市民等は、右往左往に逃げまどうて銃砲の響、劍戟の光に戰慄し、眼前最恐るべき地獄の有樣に遭遇せり云々。

安んぞ知らん、其古し、成吉斯皇帝の歐洲東部遠征の際、歐洲人等が蒙りたる慘話の二十世紀に於ける文明絶頂の今日、こゝに彼等歐洲人に依りて、成吉斯の子孫に向つて再現せられんとは。吾人は、實に因果應報の免るべからざるを視ると同時に、彼等歐洲人がこの復讐的行爲に依りて、永く世界史の上に、消ゆべからざる汚點を留めたるを悲しむものなり。

筆法は無用

說者あり曰く、習字を授くるに入釜敷筆法を教ふれども、素と筆法は人々個々の流義、云はゞ各自の本體性質を顯はせる、僻なれば、人々の書風相異なるは、恰も其面の異なるが如し。萬人の本質を同一ならしむることは、到底不可能のことなり、從て世に正當の筆法といふものは、勿論不可存のことなり。王羲之といひ、顏眞卿といひ、柳公權といひ、董其昌といひ、徵明といひ、子昂といひ、弘法といひ道風といひ、海石といひ、菱湖といひ、何といひ、蚊といふも、各〻自己流を以て書きしに外ならず、故に筆法は無用、今

の書を習ふもの、宜しく自己の流義を以て、自己の本質を顯はすが如くにして、始めて書を能くすべし。但し自己の意の適する所により、他の書法を參考に資するは、利ありて害なしと。此論極端に走るの嫌あれども、一味の眞理を存するを見る。

筆のまに〳〵

（摩訶生寄）

植木屋

世に植木屋程愉快なる職業なかるべし、朝な夕なに春も夏も秋も冬も、長閑に自然を樂みてそれにて生計を營む、さても植木屋の樂さよ、されど植木屋が緣日に懸値をいふは甚だよろしからぬとなり、彼等は僞を平氣にて詐すなり、賣價七十錢といふ植木の鉢を買客は唯五錢といふ、遂に七錢にて賣ると定まりぬ。買客も賢どや云はむ、賣主も賢どやいはむ、さるにても、我は一種變な感じするなり、凡て市中の夜店は皆此類にして之より一層橫着なるものと心得て差支なし、目前の小利に眩み、人を誤魔化さんとする小商人の商略ほど賤むべく憐むべきものはなし。

大道易者

黃昏の頃、街道の彼處此處に、算木筮竹をひねくりて人相、手の筋などと仔細ありげに人の吉凶禍福を說く、大膽なる無鐵砲の者共なり。凡そ人の心ほど弱きものはなかるべし、己が智惠の及ばぬところは皆何とか心の安め處を求むるものなり、さるにても大道易者に賃して己が心の迷ひを慰めむとする者の少からぬ中は社會は全くの文明開化に候はず。

街道蓄音機

大道易者と相對して盛に人を引寄するは本鄕神田邊の蓄音機屋なり、下らぬ俗歌を聞かむ爲に人々の立止まるなり、をかしきは暫くしてバラ〳〵と集へる人々の散ずるとなり、そは愈價を拂うて聞くべき時となれる故なり、更にをかしきは蓄音機屋が聽衆に「逃げな

くとするよい」といふとなり。彼も是も揃ひも揃ひしものなりと、徐歩の歸りの友の話なりき。

物貰ひ

人の道義心といふ弱點を狙らひて、竊かに他の者より瘠せ細りたる幼兒を借り來りて蓬頭亂髪相並びて、「ドーゾ憐なものに御情けを」と訴ふるところ、乞食も中々づう〳〵しきものなり、淺草邊此類頗る多し、されど彼等の哀訴する聲の一定のリズムを以て歌ふが如く響くは、爭はれぬ其本音を吐けるなり、げに蔽ふに蔽はれぬは人の內心の眞の實際の處なり。人の苦みを見て憐を催して惠むは人の人たる品高き處なり、されど哀訴の事情を考へずに妄に施與するは却て慈善の本旨にもとるとあり。

盲の笛吹

月の夜に未だ春風の暖かならぬに街道の小暗き片隅にて吹き鳴らす尺八の吹手は爭はれぬ盲の人なり、盲は手を出して求めぬなり、聲出して行く人に訴へぬなり、されど夜ふけて惠む人なくば悲しさは自から其笛の音に表れて訴ふるとあらむ、兎も角も彼は唯吹くのみなり、行き交ふ人も立ち止まりて耳そばだつるなり、唯聽くのみなり、盲の爲に惠む人は殆んどなきなり。促されず、迫られず、直接に哀訴せられずば、眞に憐むべきを感じながらも施し惠まぬは常人の心なり。

●東宮妃御慶事　東宮妃殿下には、既に先般青山御所にて、御着帶式を行はせられたるが、御分娩の御慶事は、多分本月下旬ごろなりと泄れ承たまはる。御命名のおん式は、御降誕後七日目に行はせられ、夫より四十三日目に、初御參內ありて、兩陛下に御對顏あらせ